

梅天の海の中道糸のごと
溝の上の畳踏ませぬ水見舞
踏まれても踏まれても落ちさくらんぼ
青芝の丘なる寝墓数知れず
暮れがての西を彩る雷火かな
日覆に吊るは蕃社の土産物
道をしへ濡れたる土を嫌ひけり
夏山の疵がゲレンデなりしかな
木刀の杖と用ひし登山かな
泉あり帝の産湯なりしとや
針金に玉つらなりし滝しぶき
雲海は空の砂漠か暮れんとす
ハワイアンダンスに真夜の卓涼し

冷房の卓のナプキン花のごと
夕焼の富士は機翼にあらはれし
炎天のエーデルワイス砂に影
峠越すまでの夕焼消えずあれ
雨乞の蝋燭岩に涙垂れ
日焼して紙屑買ひの彼老いぬ
船の舵握る蕃社の子は跣足
目を細め見るやプールの波の日を
汐筋のよたよた動くヨットかな
たはむれの子規の箱庭虫払
岩鏡日を失へばたゞの草

二〇一九年二月二六日